
姉が行く！

喜多羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉が行く！

【Nコード】

N3595X

【作者名】

喜多羅

【あらすじ】

大学2年生の主人公がある朝目覚めると、妹に蛭魔妖一という恋人ができていた。これが噂の異世界トリップか・・・でも家も戸籍もあるしな・・・とか考えていたけど、健康に影響もないのでよしとした！

姉の知らないうちに始まっていたのだった。(前書き)

こんにちは。

この主人公は他にやっているサイトの連載からひっばってきたものなので、はじめっから強かったりしますが、一応努力の結晶という設定ですのでよろしくお願いします☆

姉の知らないうちに始まっていたのだった。

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『朝起きて歯をみがいていたら呼び鈴が鳴ったから扉を開けたと思っただけ夢の中だった』

な… 何を言ってるのか わからねーと思うが

わたしも何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「おねえちゃんどうしたの？」

寝巻のスエットで寝癖をつけたまま、開けはなった玄関先で頭を抱えた私の背後からひよこっとな顔を出したのは、今日も少なくとも顔だけは可愛い我が妹だった。

ついすがるような視線を向けてしまったが、妹の視線はもうすでに私のむこう側・玄関へと移り、その瞳は心なしかきらきらしていた。

そこにいたのは、イケメンだった。

しかも綺麗系。細いけどがっしりした体つきで肌が白くて一見冷たい印象の顔がとにかく整っていて扉を開けた時は「あ、はじめまして、お姉さんですか？ 僕、妹さんとお付き合いさせていただいています」なーんてごていねいに挨拶までもらっちゃってあははもーな

んてやつだ好きな人すらまともにできないこの姉を差し置いてこんな素敵な恋人をつくっていただなんてさすが私とちがって友人が多くて人間関係豊富なだけあるでもこの真っキンキンの頭はどおかなあ下品さのないきれいな色でかっこいいけれどもそのとんがった耳の二連ピアスはどおかなあ表情は爽やかにこやかで感じはいいけれどもあははははははは

遠くを眺め始めた姉のことなど意に介さず、妹は幸せそうに「おはよう」と言って微笑むと、ぶつぶつ言っている私のほうへくると向きを変えた。

あらすこし照れてるんじゃないかしらめずらし「おねえちゃんっ」

ごほん、と妹は咳払いをした。

「紹介するね、私のこ、こ、ここ恋人の・・・蛭魔妖一くんですっ！」

「よろしくおねがいします、オネーサン。」

「ヨロシクオネガイシマース」

可愛らしい我が妹はきゃっと言って顔を赤くし、青年は爽やかに手を差し出し、全くおかしくもないのに湧きあがる衝動のまま笑っていた私は拒めずに彼と握手した。

デビルバットゴーストのごとく理解の余地と言うものにかわされたまま、私はデートに行くという二人を見送った。

そんなけなげな姉に向かって妹が残していった言葉がこれだ。

「おねえちゃん、頭に歯磨き粉ついてるよ？」

私は右手に歯ブラシを持ったままだった。

姉は絶対認めない！

なんてこった！

わたしは頭の齒磨き粉をシャワーで流したあと、再び頭を抱えた。

あの完璧な金髪に始まる彼の全てが、『蛭魔妖一』を形作っている。
彼以外考えられない。
なんてこった…

あれはどう見てもコスプレではないか！！

しかもかなり完成度が高い。

劇舞台張りの化粧もなく、あれだけ高レベルな再現ができるとは…

まあ、そんなことはどうでもいい。

問題は、我が妹があのコスプレオタクヤローと付き合っているということだ。何故だ。あれは見目がいいがただのコスプレイヤーなのだぞ、妹よ！

そっちは私の専門だったはずではないか！

おまえは家のおされっ娘担当だったではないか妹よ！！

こちらへ落ちてきてくれるな妹よおおおお！！！！

「ちょっとあんた！今日は授業ある日でしょう！！遊んでないで早く行きなさい！！」

悩みを抱えた娘に放つ言葉ではないと思う。

そしてちょっと傷ついた、ナイーブな私に母が言った言葉がこれだ。

「あんた、頭にごはんつぶついてるわよ」

時間がないのでそのまま家を出た。

姉は絶対認めない！（後書き）

これが俗に言う 見切り発車 というやつだな自分よ・・・とつぶやいている喜多羅です。

プロットって具体的に何なんだ？無いとだめなのか・・・？

そして原作は終了してからこっち読んでない喜多羅です。

買おうかな・・・

姉は落ち着きを取り戻すことにした。

ごはんつぶは大学についてから友達にとってもらった。

その日から、三週間弱。

あれは何か思い違いかな。私も随分侵されたな。と思ってちよつと怖くなって2日ほど二次元断ちしたり、オタクな私に対する悪質な冗談かしらとも思って妹の人格の根っこを疑ってみたり、そんなこんなでさすがにちよつと記憶がぼんやりしてきたところにまたごつーんときた。

「おねーちゃん、あのね。」

いやな予感はした。この、つい可愛い！と思ってしまいう目づかいは、何か私に言いづらいことがあるときの表情だ。

ホント、黙ってれば可愛いのに。

まあ、あんまり困るようなことは言わない子だから「今日ね、家に蛭魔くんがくるの。」

固まった私の右手のフォークからべっちゃと落ちたのはオムレツだった。あああああああ……

「へーそおーなんだあー！……えーっつと、お姉ちゃんは、いない方が、いい、かな？」

お家デートってやつだよね？と、明るくふるまう私はきっと世界一素晴らしい姉に違いない。

そして、にこにこしている（であろう）私のその言葉に、驚き、もじもじする妹はやっぱり可愛らしい。

「えっ?!ち、ち違うよ!ただ、ちょっと誰かに言いたかっただけ・・・」

かんわいいなあもおお!

最近、見た目だけでなく、中身まで可愛らしくなってしまった妹であった。

それはあの『カレシ』のおかげなのだろうがしかし、納得がいかない。

あの男・・・まだそれを名乗っているのか?!本名はなんだ、本名は!!!!何だそれは芸名か?!ギャグなのか!私が「もう冗談はよし子さん★」とか突っ込まないからそのネタ引きずっちゃってるのか?!私が悪いのか!!それとも私がバカなだけで、実は『蛭間陽一』とかそういう・・・

あ、あれ？

・・・そ、そうかもしれない。私がバカなだけなのかもしれないやそんなまさか。

「そ、それだけだから！べつに、そんなんじゃないから！あでも、はずか、しいから・・・お母さんたちには、内緒にして、ね？」

これぞ恋する乙女！ってのを体現している妹は、そんな可愛らしいことを言った。

・・・そんなまさか、かもしれない。きっと、アニメの見すぎなんだな。

いいや、今日も家でだらだらしようと思ったけど、今日は外に出てみよう！買い物しようしよう！

そして、むこうへ傾倒しかかったこの心を、現実社会に引き戻してこよう。

確かに漫画やアニメは楽しい。

でも、現実世界にだって、楽しいことはいっぱいあるんだ。

いや、現実存在するものにこそ、楽しさがあふれているんだ！

チャイムが鳴る。

妹が嬉しそうに玄関へ駆けていく。

私は最後の一口を口に入れると、食器を片づけた。

それから彼氏を連れてリビングの方へ来た妹に笑顔で言った言葉がこれだ。

「私、出掛けてくるね。夜まで帰らないと思うから。」

そして、いつもの3倍のスピードで準備し、家を出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3595x/>

姉が行く！

2011年11月17日01時12分発行